

中村素堂

大正時代の中ごろに何という本屋からだが忘れてたが、このごろの大型手帳くらいの小さい本で国文の叢書みたいなものが出て、金五十銭か六十銭で買えるのがうれしくて、「古今集」「新古今」「徒然草」「十六夜日記」など平安、鎌倉のものを小遣いをためて買いつつ、よく判りもしない華にくそまじめに読んでいた。

これは小学生のころから大日本歌道奨励会という短歌の会から出る「歌」という月刊雑誌をとって歌みたいなのを作り始め、何とも自分の語彙の貧しさに驚き、鎌倉宮司をしてもらった矢野豁という中学の先生に、フとした縁から「日本文学の古いものはひと通り読まねば……そして古歌の一、二首ぐらいはおぼえていなければならぬ」といわれ、一生懸命に背のびをして、あれもこれもと囁っているうちに、歌をやるなら少し字もうまく書かないと、歌まで一緒にまずく見える——などと評されて、初めて手習いもしておかなければいかんナと気づいて、まず仮名からと早速歌に使えものから習うことにした。

東京・神田の猿樂町に住んでおられた小野鷲堂という、そのころ日本一の偉い先生だということで、特に頼んでいただいてお稽古に伺ったが、あまり良くご指導をいただかないうちにおおくなりになられ、その先生のおやりになつていた斯華会という書道会からの「書道研究」という雑誌をとることだけになって、雑誌を見ると、仮名よりもいろいろと書体を変えて書かれている漢字の方に、目移りがして漢字を習う方が多くなり、書道学習といつてもその領域の広いに驚いてばかりいる状況だった。

これより数年前にお勤めに出ることになって勤めたり学校へも

通ったり忙くやっていて、歌はしばらく中休みとなつても書の方は何といつても中断できないでいた。漢字の大家、武田霞洞先生が同じお役所にお勤めであられるために、朝に夕に眼に触れるものは雄大な先生の漢字ばかりであった。

最初のうちは一向に鷲堂先生の美しく柔かい漢字に心酔していたので、厳しく雄健な霞洞先生の漢字になじめなかつたのであるが、いつからともなく六朝派と呼ばれ、またその六朝派といううちでも霞洞先生は春洞派といわれる系統であることも後で判つたが、この堂々たる書風に圧倒され、そのころ芝の増上寺のうしろの方にあった先生のお宅へ入門して関東大震災などを経て、青山南町の方へ移られてお亡くなりになられるまで、十四、五年もご指導をいただくことができた。楷・行・草の書法を授かった。

私が大正十四年の秋から東京市立の商業学校で書道の教師になることができたのも、ひとえに先生のご指導の賜であり、その後二、三の高校やいくつかの大学の先生を勤め、愉しく趣味が職業になつて八十の坂を越しても、まだ愉しく愉しくて日々研究に励んでいるのも、みな先生の影響です。

そこで大正中期から大正末期、昭和にかかるところの書道雑誌のことと、私の書道人生に大きく影響した先生のお人柄とその書風に頼つて申し上げてみたいと思ひます。

鷲堂先生のご刊行の「書道研究」誌は有名なゆつたりした雑誌で、たしか月五十銭くらいの会費であり、今日では仮名のご専門のようになつていますが、隸・楷・行・草・仮名と書道ひと通りのものは全部揃つてお手本が載せられ、これが鷲堂先生ご門下の諸先生の誇りでもありました。

日下部鳴鶴先生、この先生は西川春洞先生などと同じく六朝派と呼ばれるうちで、鳴鶴派と称せられる書法の巨匠で、この系統の諸先生はいくつかの有力な雑誌を刊行しておられた。(つづく)